

仮面ライダー 偽！！

ショッカー戦闘員（掃除用の改造人間）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公 猪突猛進はギャルのパンティーを手に入れるべく男を駆逐してやると意気込み仲間を集めるべく大海原に出る!!

一方 不倫から生まれた膝太郎は股下金玉と裏筋太郎と一緒に旅館業を営むも、裏家の風俗が密告により警察の摘発を受けてしまう!

さらに 地獄では閻魔達の過重労働に対するストライキによりトイレを流さずに放置するテロが多発する。

さあ七股をかけ武器をもった彼女に囲まれた伊藤誠の運命は!?

すいません 大嘘です m ( ) m

本当は…偽物が本物に成る  
お話です

# 目次

朽繩様	朽繩様	朽繩様
三話	二話	一話
18	7	1

## 朽縄様 一話

これはつい最近起こった出来事です。

私自身今でも あの体験は夢だったのでは？

と思うことがあります、弟もハッキリ覚えているので  
記憶が鮮明なうちに書いておこうと思います。

それでは聞いてください

私達が蝉が鳴く季節に体験した出来事を・・・

私たち姉弟は夏休みを利用して母の実家に遊びに来ていましたこの時一緒に来たのは父は仕事で母のみです。

あつ ちなみに私は中学2年生、弟は小学校4年生です。

母の実家はかなりの田舎なのですが、住民は多く夏には  
学校の敷地で盆踊りを開催して大いに盛り上がります。

私たちはウキウキ気分です祭りに参加するために弟と一緒に  
家を飛び出しました。

地元の子達ともすぐに打ち解け屋台巡りをしていたときのことです。

(ちなみに私はフランクフルト、リングアめ、綿飴を両手に持った状態でした)

早矢「あれ？ 勇人？ どこいった？」

いつの間にか勇人がいなくなっていたのです。

勇人 s i d e

「やっべー！ この祭り半端ねえ！ やっべー！ やっべー！」

俺は勇人 今世紀一の超絶美少年だ！

今日はお袋の実家に来てそこで開催されているという祭りに来ている！

最初は乗り気じゃなかったんだが、顔しか取り柄のない

摩擦ゼロの胸を持つ俺の姉、早矢に

早矢「ほら勇人が楽しませてた祭りだよ！ 祭り！ お姉ちゃんが付いてってあげるから

行こ行こ！」

誰が楽しみにしてたんだ 俺をダシにしたところでもいい味噌汁なんかできねーぞ  
ミス・ゼツペクス

だが、この時の俺はまだ知らなかった 祭というものを

この祭りだがとにかく規模がデカイ (俺が小つちえんじやねえぞ)

櫓を中心に音楽にあわせて着物を着た老若男女が踊り、その櫓のうえでは顔が30点  
くらいのニーチャンが太鼓をフルコンボだドンしてやがる。

だが驚くのはこの人集り、まるでアリの巣をデストロイした後にパニックで地上にわ  
んさか出てくるアリののように人民共がそこらじゅうから来てらあ (まあ俺もそのアリ  
の一部なんだが)

昼間に俺の仲間と遊んでたときにはせいぜい数人しか人を見なかったのに

こいつら夜行性なんじやなからうか？

俺は同士のA B Cと共に佇んでいた

この三人は昼間にカプトムシ、クワガタムシ (売却用) を捕獲するために生死をとも  
にし、苦難を乗り越えた仲間だ！

俺たちは腐るほど有りやがる食いもんやゲームの屋台に突撃していった

一通り蹂躪した俺らだがここでアクシデンツが発生した。

射的をやっていたんが、どーもおかしい

B 「この景品全然倒れないよ！」

C 「弾の詰め方が甘いのかなあ？」

店主のおつちちゃんはニヤニヤしながら

「残念だったねwwww もうちよいだよ！」

とか言つてやがる 風貌も明らかに堅気にやみえねえ入れ墨も見える

ゲーム機なんかの質量があるやつはコルク銃で倒れねーのはわかるがちっこい菓子  
が微動だにしねーのはどういう理屈だ？

菓子が 倒れてたまるか！つて踏ん張ってんのか？

まあテキ屋なんかヤーサンがやってんだろ にしてもガキ相手に大人気ないなナイ  
ンテナインの岡村みたいな顔をニヤニヤさせるのはムカつく（ゝゝゝ）

だがAが、

A 「仕込んでんじゃねーの？」とAが言つた途端

笑顔が消え がなり立ててきやがった、

俺は（アカン！ ヤバいタイプのヤクザだ！）と思ひ足が竦んじまった BもCもだ  
だがAはBのコルク銃を奪い取るとあろう事かそのヤーサンに発砲した！

そしてなんと右目に命中した！

ヤ「ぎやあ！」

A「走れー！」

俺たちは我に返ると一目散に走り出した！

運動会で何故この速度が出る？と思うくらい速く走った

ヤ「待たんかー!! なめやがって!!」

あいつも追っかけ来やがるが、俺たちは人混みの中を豚の大群を華麗によけてジョーに接近する力石のようにスルスルと抜けてくが

あいつは道行く人に「邪魔だ!! どけや!! ボケ!!」

と大声を出し暴力をふるっている

偶然通りかかったオカマ「キヤ！」

ヤ「どけや!! バケモン!!」

その声を最後に喧騒は聞こえなくなった：

俺が振り向き網膜で認識してしまった光景は

俺達を追っかけてたヤーサンがさらにながたいのいいオツサンから熱いヴェーゼを受け取っていた光景だった

ヤクザのおっさんの目に生氣はなく両手をダラリとさげされるがままにされている一方、もう一方の……まあ 何とか形容しがたい淑女のような格好をしたオツサンは丸太のような筋肉がパンパンに腫れ上がり血管が浮き出た腕、右手を相手の頭の後ろに廻し 左手を腰に廻し、青い髭の剃り後のある顔を密着させていた

周囲の人間も俺もその光景を脳が正しく認識することが出来ずフリーズしていた……

スナフキン（この世にはいくら考えてもわからない、でも長く生きるとで解ってくることがたくさんあると思うんだ）（～～）v

そして 俺達は いつの間にか 人が来ないという神社に来ていた

# 朽縄様 二話

勇人 side

俺達4人は祭りを抜け出し、古ぼけた神社の境内に居た。

全員息を切らし、Cに至っては座り込んでいる。

A「ハアツ ハアツ よし！逃げ切ったぜ！ウハハハハハ！」

Aの笑い声が木霊する

B「なあ、ここつてさ なんか他の人が近づかないことで有名な神社じゃね？」

C「荒れてるね」

誰も手入れをしていないのだろう 荒れ放題というわけではないが、所々、草が生え

自然の匂いが漂ってくる

俺「なんかでるんか？ 引き上げた方がいいんじゃないか？」

普通ここで おもしろそうだし肝試ししようぜ！と誰かが言うかと思いきや

A「だな なんかに憑かれたりしても面倒だ……」

B「酸性！」

C「ルパン三世！ ふくじこちゃん」

な  
おお！コイツら意外と物分かりがいい！どうやら怖い話定番の展開は避けれそうだ

と、思った瞬間だった

全ての音が消えたのだ さっきまで聞こえていた虫の鳴く音 風で木々や木の葉が  
こすれる音

極めつけは、祭りの音まで聞こえないのだ

これはいくら何でもおかしい

虫は人間が近づいたから鳴き止んだと解釈出来るが祭りの音はどこいった？

太鼓のニーチャンがサボってんのか？

そして空気が重くなった

ヤバい

まるでこの空間だけ他と隔絶したかのように、時間が止まったかのように

A 「新手のスタンド使いか?!」

確かにD I Oがザ・ワールドを使えばこんな感じになるのかもしれない 花京院の二の舞はゴメンだ

この異常事態に対してもそんなことが言えるAに俺は心からの讃辞を送った

コイツの精神は間違いナシに黄金の精神でできている と確信した。

BとCはオロオロしてるだけだ

俺はふと 神社の方を見た

女がいた

俺はそいつをみた瞬間小さい耳鳴りのようなものがしだし、冷や汗が出始めた

B 「な、なんかおかしくね？」

A 「……出たか？」

C は半泣きだ

俺は目の前の女から目をそらせなかった  
すると

女が近づいてきた。

女は、祭りの女が着ているような綺麗な着物ではなく、白っぽい浴衣のような着物を  
着ていた。

俺は、Aに耳打ちした。

俺「やばいぞ。素直に謝るか？」

それか逃げるか？」

A 「なっなんだ？ 誰かおるんか？」

俺「……見えねーのか？」

A「……お前は見えてんのか？」

B「……音は聞こえる　なんか　ズリ　ズリ　て」

Cは恐慌状態

A　はキョロキョロしたり、目を細めて遠くを見据えるようにしているが、どうやらその女は俺にしか見えんらしい。

とうとう女の顔が判別できるくらいの距離に近づいてきた。

……おかしい。

そこで明らかに異形のモノだと分かった。

まず何よりおかしかったのが、女の目だ。

蛇の目だった。

小さな目が左右に離れて配置され、あの爬虫類独特の、ナイフの刺し傷のような、縦に細く閉じた瞳孔をしていた。

鼻は細く、口も小さい、全体的にほっそりした姿勢をしている。

俺は、蛇に睨まれた蛙のように、その場で固まってしまった。

C 「帰ろう！ 帰ろう！ ヤダヤダ！」

C が喚ぐが、何だかえらく遠くに感じる。

女は、その蛇の目をパチパチさせると、急に細長い手足を……あり得ない方向に曲げだした。

まるで糸の切れた操り人形のように、はたまたゴム人形のように、ぐにやぐにやと、でたらめに関節を曲げるのだ。

更に最も不気味だったのは、女が首を横に傾けたかと思うと、そのままどんどん曲げ続けて、ついには胸の前で頭をまるつきり逆さまにしたことだ。

完全に人体の理を無視した体勢だ。

俺は悲鳴こそあげなかったものの、全身の血の気がスーツと消えて震えが止まらなかつた。

女は俺のその反応を確認するかのようになり、ニタニタ笑って、その逆さまの顔でわしを覗き込み（手足がぐにやぐにやに曲がって、ちょうど顔の高さが合っていた）、

「お前、見えてるだろ？」

と聞いてきた。

確認している

俺は、反応したらマズいと感じ

俺「そういやガツチマンさんの実況見た？ あの人数げーよな！」

と内心はガクブルだったが無理矢理話題を振った

他の3人も意図を察したのか すぐのつてきた

A「あの人はホラーの攻略法をすぐ編み出すから見てて気持ちいいよな」

C「ぼっ僕もみたよ！」

と涙声で叫んだ。

4人で無理矢理ワイワイ談笑をし、ジリジリと階段の方へ後ずさりし始めた

もう一步

もう一歩だ!!

もう一歩で足がかかる!!

そう思い 足を伸ばしたときだった

見えない壁にぶつかった

そんな!?

俺は内心僅かにあつた希望が、霧散した

大魔王バーン（知らなかったのか？ 大魔王からは逃げられない）

どつかの大魔王のセリフが脳内再生される

俺は動揺し、神社の方へ向いた

女の顔が目の前にあつた  
しかも完全に悪意のある笑顔でニタニタと

俺「うわあ！わわわ」

女はますます愉快そうに目を細めて、  
「なーんだ、見えてるじゃないか。

生意気なガキだな。」  
と言ってきた。

しまった！と思つたときにはもう遅い

全身が、金縛りになった

声は出せるが、体が動かない

俺はもう足がガクガク震えて、涙でぐちやぐちやで、隣でAが何か喋ってるが、それも耳に届かないような状態で

「ごめんなさい…。」

ごめんなさい…。」

と目をつぶって謝った。

すると、女は俺の目と鼻の先でガクガク　グギョグギョと全身を震わせて、元の人の佇まいに戻り、ニターつと楽しそうに笑って

「お前、今夜迎えに行くから待つとれ。」

と、俺の左手を撫でようとしたときだった

？「君達!!ここで何してるんだ！」

一気に動くようになった

見ると階段の下から20代後半くらいの兄ちゃん（太鼓を打ってた人とは別）

が声を張り上げていた

俺達は転がるように階段を駆け下りた

途中 後ろから、「チツ」という舌打ちと

「まあいい 匂いは覚えた」

という声が聞こえた。

## 朽縄様 三話

勇人 side

俺たちは階段を駆け降りると同時に、下にいた兄ちゃんに

「大丈夫か!? なんか上の方から悲鳴が聞こえてきたけどなんかあつたんか?」

と聞かれ 今起こったことを細かく話した。

そうしたらその人はみるみるうちに険しい顔になり

「櫓あつたる、あそこの近くの公民館に別の神社の神主さんもいるから事情を説明しよう。」

俺たちはすぐさまスタート地点近くに戻つて来た。

祭りも終盤らしく さつきより人が少ない

公民館に入ったところ俺の姉が、

早矢「勇人!! 全く心配かけて どこ行つてたの?!」(お姉ちゃんこのまま出番ないかとおもつたわ!)

「あの、すいません 叱る前にちよつといいかい? ○○のところの神主さんとあと

あの神社に詳しい人を連れてきてくれ」

お兄さんが酒を配っていた人にそう言うとう　俺達は別室に案内され　そこで待つように言われた。

しばらくすると平安時代の服装をした年配の人と坊さん？つばい人が来た

神主「さーて　何があつたのか詳しく話してくれないかな？　できるだけ詳細にね。」

俺たちは神社であつたことをそのまま話した。

しかし　ここで意見の食い違いが出たのだ

神主「ちよつと待って、その女の姿をみたの？それとも声だけ聞いたの？　そこんこ

こを詳しく頼む」

結果、話をまとめると

俺「姿も見えて声も聞いた、というか話し掛けて来た。」

A「声は聞こえた。　どの辺にいるのかもわかった。」

B「音だけ聞こえた」

C「やな感じはわかつたが、何もみてないし、聞いていない。」

こんな感じだった

すると今まで沈黙を保っていた坊さんが

「皆さんの左手を見せてください。」って言ってきた。

全員の左手を確認すると困惑の表情を浮かべて、

「おかしいですね。全員左手の小指があります。」

何のことかわからないでいると、俺はあることを思いだし、

俺「そういえば、俺の左手を触ろうとしてきた。んで、階段を駆け下りるとき、舌打ちと

(匂いおぼえた) って言ってた。」

と言ったところ二人は目を見開いて、

神主「初めてのケースですな」

坊主「取り合えずこの子たちの保護者に連絡を、事情を説明しましょう。」

んで、しばらくすると、それぞれの保護者召還

それぞれの親が呼ばれ頭に？マークが出そうな顔してると神主があの子について説明してくれた。

・あの女は朽縄様と呼ばれていて非常に残酷な神様であること

・時折自分の姿が見える、つまり波長の合う子供に印をつけて攫い、食えるということ

・この子たちが危険であり、恐らく一番危ないのは俺であること

母や姉は半信半疑だったが、神主さんが直々に家に来て結界をはるのと、あとなんと

村の警官を一人つけるとのことだった。俺はこの時初めて大変なことになったと、感じ始めていた。

青年 s i d e

僕の名前は本郷周（ほんごう しゅう） 23歳

スマホの販売員をやっているものだ

毎日何のために生きているのかわからない。

先週の出来事だ

課長「おい本郷！ ちょっと来い！」

本郷「はい どうかしましたか？」

課長「先週お前、このスマホを売ったんだってなあ」

本郷「あっはい ご来店なされたお客様が 格安スマホでRAMが4GB 以上、ROMが64GB以上の商品をご希望でしたので、5つの商品をご紹介します、それぞれの商品の特徴をご説明させていただきました。しかし、最終的にはお客さま自身が納得頂いた商品をお買い上げいただくように対応しましたが？」

課長「この能無しが！ てめーは社会の常識を何もわかつちやいねー!!」

本郷「なつなにか 至らぬ点でもありましたか？」

課長「大ありだ！ このクソバカ！ こっちを売れつて指示だったろ！」

本郷「え?! しっしかし、これは2世代も前のモデルで…」

課長「バカかお前！ そういうときはな、相手から断る理由を一つずつ聞き出して潰

して買わせるんだよ そしたらお人好しは買うだろ!!」

本郷「そつそんな 人の善意につけ込むような…」

課長「なんだお前… 俺に逆らうのか？」

本郷「いいいいえ！」

課長「…減給と調査書に書くわ あと てめーを裏に回すわ」

本郷「なっ?!」

課長「わかつたら うせろ！ ったく人事もなんでこんなゴミ取ったんだ？」

会社に行けば様々な嫌がらせをされ、パワハラや暴言は当たり前、功績は横取り、洗脳紛いのことも新人にやってくる。

なんなんだろうな…俺の人生…

この2週間後、俺は地元へ帰省し、夏祭りに顔を出した。

少しでも気分をリフレッシュさせたかった。いや、きつと離れたかったんだな。嫌な人間関係から

少しブラブラ屋台を見て回っていると、向こうの方から怒声と、小学生くらいの子どもが3〜4人走って来たんだ何事かと思い、見ていると、怖い人が人々をブルドーザのように掻き分けて、向かって来た。

僕は体を鍛えていたから、サツと避けた

そして、まあそのヤクザみたいな人がオカマにぶつかっただよ

で、オカマの人がなんか「優しさを教えてあげる！」って言っていきなりキスしたんだよ

いやーびつくりしたわ！ まあおかげで珍しいもの見れたけど

僕はさつきの子供達がどこ行ったか少し気になり、あの子たちが走って行った方向に歩き出した。

けど見当たらずに、諦めかけて戻ろうとすると

「うわあ！わわわ！」という悲鳴に近い声が神社の上から聞こえた。

「!？」

俺は咄嗟に上の方に向かって声を張り上げた。

そして転がるようにさつきの子供たちが下りてきた。

全員顔が真っ青だ。

俺はこの子たちから上で何があったのか聞き出すと信じられないことを言ってきた。

でも嘘を言ってるようには見えないし、俺もそこまで頭が固いわげじゃない。だから、取り敢えず神主さんが集まっている公民館に、連れて行くことにした。

しかし、俺はこのときは知る由もなかった。

この日の出来事は俺の人生のルールを劇的に変える切り替えポイントだったことに  
：